

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館

外山

徹

紀伊徳川家の成立



紀伊徳川家の居城和歌山城 提供：一般社団法人 和歌山市観光協会

近世初頭の苦難の時代。八世源實の後を承けたのが九世源恵であるが、源恵については謎が多い。

高尾山九世源恵

源實から源恵への法流継承については天正五年(二五七七)三月、同一七年七月、一八年二月付の印信が残る。天正一八年の早春は豊臣秀吉の来攻を目前に控え、北条領内では慌ただしく戦備が整えられていた頃である。そして、印信授与の後、源實は北条氏照の家臣らとともに八王子城に籠る。

落城の際、辛くも脱出し得た源實だったが、前号に取り上げた勸進帳を認めたのはその後のことである。後世の記録によると、源實は慶長五年(二六〇〇)に隠居、跡を源恵が継ぐことになっていくのだが、この慶長五年という年次の根拠は同年七月二日付で源恵が高野山一心院阿光坊忠實から授かった印信からも見えない。これはもちろん

阿光坊を道場とするので、その時、源恵は高尾山から遠く離れた地に在ったことになる。源恵がなぜ高野山で付法を受けたのかその理由は定かではない。源恵は阿光坊の法流を頼むことで高尾山の復興を試みたのかもしれないが、その後の動静は不明である。源恵は在任二二年で元和六年(二六二〇)八月八日寂と先の記録にはある。源恵は弘治三年(二五五七)の印信にその名が見えるので、この記事では年数が経ちすぎている感もある。

さて、葉王院に残るこの間の年次を持つ文書に、慶長一〇年の徳川秀忠による軍令条目がある。なぜ戦陣での取り決めなどを記した寺院と一見無関係な条目が残るのか、その経緯は定かではないが、同年は秀忠が二代將軍に就任した年。高尾山衰運の時においても時代は刻一刻と移り変わっていた。

家康の男子

徳川將軍は代々諱の頭に「家」の字を名乗ることが多いが、そうではない將軍も四人いる。継嗣が絶えて傍系から入ったことによるのだが、この秀忠だけは違う。すぐ上の兄秀康は小牧・長久手合戦の和睦条件として秀吉の養子となったことから、その名乗りとなった。秀忠が徳川家の嗣子となるが、やはりその諱は豊臣家との盟約関係によるということになる。一番上の兄は信康。これは織田信長との関係。家康には男子が十一人いたが、その諱にはその時々々の政治的状況が反映されている。東条松平家を継いだ四男忠吉は兄の偏諱を貰っていることになる。五男信吉の「信」の字は武田家の名跡を継いでいる関係。六男は忠輝、その下の弟二人は早世。その下の九男となると、もう生年は関ヶ原の慶長五年である。

この九男義直からはまた名乗りの傾向が変わる。物流と情報の行き交う要地であった。

一〇世秀秀の晋山

その二年後の元和七年(二六二二)二月四日のこと。山城国醍醐寺の田中坊において高尾山二〇世秀秀は無量寿院の正嫡堯門から付法を受けていた。無量寿院とは三宝山元海が創設した院家で、その法流は元海の弟子の内、一海から俊賢、俊豪、そして高尾山中興俊源の師とされる俊盛へ相承されている。その俊盛から十代末が堯門である。堯秀は同時に聖教や法器を授けられており、これは下向する関東の地に醍醐派の伝法拠点を再興する動きではないかと考えられる。堯秀と先代源恵の間に直接的な交渉は確認できず、ここに醍醐寺主導で高尾山再興が着手されたことになる。

【参考文献】

小山警城『徳川御三家付家老の研究』(清文堂、二〇〇六)

一〇男は頼宣、二男頼房。この三人は將軍の偏諱を貰わず、「義」「頼」というのは徳川家が標榜していた源氏累代の諱から取ったものだろう。年の差もあり、將軍からは多少距離のある末の弟たちだった。これだけ人数がいれば一門の行く末も盤石と考えたいところだが、物事はそう単純ではない。結果的に末弟の三家だけが徳川の傍系を継ぐに止まった。

長子信康は早くに謀反の疑いで自刃。秀康は秀吉の実子誕生により結城家へ入り、後々松平姓に復すがもう家臣の家柄なので徳川姓とはならなかった。忠吉・信吉は若くして病死して継嗣なし。忠輝は不行跡を理由に改易となつている。義直以下の系譜が後々御三家となるのだが、初代の頃からその態勢が構想されていたわけではない。むしろ、初期の徳川家の身内からは意外に多く

の改易者が出てくる。秀康の長子忠直、秀忠の三子忠長も兄家光によって改易されている。忠長は叔父頼房の三才下で年齢的には同世代である。兄弟手を携え一門の繁栄といかないのは、源義朝・義賢、また、頼朝・義経の頃からである。兄弟は相手の器量が優れば優れるほど自身に脅威を及ぼす権力抗争のライバルとなつてしまうのである。

徳川頼宣の来歴

家康はこの末の三兄弟に手厚い配慮を示し幼少の頃より名古屋、甲府、水戸という要所に配して大名とし、有力家臣を付家老とした。家康は秀忠へ將軍職を譲つた後も大御所として駿府に在つて権勢をふるつたことはよく知られる。隠居の後、なお権力の座に留まる嚴父の配下によつて守られる、秀忠からすると親子ほども年の違う年少の弟どもはその目にどう映つ

ていたのだろうか。紀伊徳川家の始祖である家康の一〇男頼宣は慶長七年の生まれ。翌年には早世した兄信吉の後を承け、わずか数え二歳で水戸二〇万石に封ぜられるが、自身は父家康の許で養育されていた。同一四年には駿府へ移封となり五〇万石が与えられるが、父家康の側に置かれ異例の厚遇と言える状況にあった。元和二年、家康死去。二元政治が解消され、同五年には大々的な諸大名の移封がおこなわれた。広島藩福島正則が無届の居城修築の責めを負つて改易となる。西国に隠然たる勢力を有していた豊臣旧臣は目障りな存在であっただろう。

正則の後には和歌山から浅野長晟が入り、その後に納まったのが頼宣である。兄義直は東海道上の要衝である名古屋に在り、弟頼房は江戸に程近い水戸の藩主で、しかも將軍に近い常府の立場である。

元和五年の国替は大々的であったが、家門の大名の中では頼宣だけ移封の対象となつた。

一説によると、將軍秀忠は父家康に引き続き駿府という要所に五〇万石を構える頼宣を煙たく思つていたとも、寵愛する三男忠長を駿府に配するため頼宣を追い出したとも言われており、この頼宣の和歌山移封の評価はさまざまである。畿内の抑えを期待するならば大坂でもよいはずで、僻遠の地への移封という評価もあれば、いや、和歌山というのは西国から江戸への海路を抑える要地を任されたのだという主張もある。この点に関しては伊勢松阪を飛び地として領有していたことから、やはり交通の要路を押さえていたと言えるのではないかと。松阪は上方と東海地方の結節点であり、三井越後屋や紙問屋小津家の本拠でもある。後に本居宣長が居を定めるなど、